

フルンボイル遊牧社会における地縁結合

—Ya. シャーリーボー氏の口述に現れた“アイマグ”をめぐって

中村 篤志*

Territorial connections among nomads in Hulunbuir, Mongolia: Focusing on “Ayimag”, Mr. Ya. Shaariibuu’s oral history

NAKAMURA Atsushi

要旨

従来のモンゴル遊牧社会に関する研究は、単位家族が複数集まって作る四季の宿营地集団「ホト＝アイル」に注目が集まり、「ホト＝アイル」の外縁に広がる広域の社会関係については、歴史的にも文化人類学的にも本格的に論じられてこなかった。

本論では、内モンゴル・フルンボイル地域シン＝バルガ鑲白旗に存在した「アイマグ」と呼ばれる地域内小集団を取り上げ、その集団の編成原理や 20 世紀前半期を通じて果たした社会的機能を、Ya. シャーリーボー氏ら古老からの聞き取り調査を中心に解明した。

1910-40 年代の鑲白旗には、ソムなどの行政組織とは別に、方位や特徴的地形によって識別されるアイマグと呼ばれる集団が存在した。アイマグは 3～4 つの大アイマグと、11 の小規模なアイマグが確認された。小アイマグは多くて 30 戸程度の集団で、特徴的地形（主に夏营地）を共有する地縁的組織である。小アイマグは、季節移動（特に頻繁に牧地を移す冬季の移動）などの遊牧生活における互助を主とし、時に行政を補完する機能も有した。アイマグのダルガ（長）は有職者や有爵者である必要はなく、遊牧の知識や経験が豊かな年長者が選ばれた。

また 1945 年に鑲白旗人ら約 1,000 人がシャーリーボー氏らに率いられモンゴル人民共和国に移住したが、移住後に共和国の行政組織に再編される際にも、新設ソム下のバグは、各人の所属アイマグを基本のまとまりとして編成された。

最後に、今後の課題として、遊牧社会における自然環境と遊牧形態と社会組織の相互関係、遊牧や祭祀を通じて強化・階層化される現地住民の空間認知の問題、アイマグ自体の歴史の変遷過程などを挙げた。

キーワード：モンゴル、フルンボイル（呼倫貝爾）、バルガ（巴爾虎）、遊牧社会、地縁結合、アイマグ

Keywords：Mongolian nomads, Hulunbuir, pastoral societies, territorial connections, ayimag

目次

1. はじめに
2. インフォーマントについて
 - 2.1. Ya. シャーリーボー氏の経歴

*山形大学人文学部

- 2.2. その他のインフォーマント
- 3. アイマグの名称と分布
- 4. アイマグの編成と社会的機能
 - 4.1. 小アイマグの規模と社会的機能
 - 4.2. 小アイマグの運営
 - 4.3. 大アイマグの機能について
- 5. 1945年の移住者名簿と所属アイマグ
- 6. おわりに

1. はじめに

本論は、内モンゴル・フルンボイル地域に存在した地域内小集団「アイマグ」について、その集団の編成原理や20世紀前半期を通じた社会的機能を、主に古老からの聞き取り調査によって明らかにし、モンゴル遊牧社会研究に投げかける課題を整理するものである。

モンゴル遊牧社会の基層組織に関する研究は、主に文化人類学の分野から進められてきた。特に、複数戸が集まって四季の牧地を共有する宿营地集団「ホト＝アイル (qota ayil)」に研究が集中し、ホト＝アイル内の家畜管理や、離合集散（誰と組むか）や季節移動のパターンなどが詳細に論じられている（注1）。しかしながら、ホト＝アイルの外縁にあってその活動をゆるやかに規定しているはずの種々の要因（例えば、自然環境やほかのホト＝アイルとの協同関係、所属行政単位内の社会関係など）は十分考察されていない（注2）。

他方、歴史学の分野では、主に清朝治下の漠北ハルハ地域を対象に、基本行政単位である旗 (qosiyu。ホシヨ) 内で、王公タイジの親族集団が、旗を地理的に5つ程度のエリアに分割し、土地や旗民を分け合い割拠していた可能性が指摘されている（注3）。しかし、親族集団が果たした社会的機能（分割エリア内の社会関係をいかに規定していたのかなど）や、王公の親族集団以外の集団構成原理が未解明であることから、王公不在地域の社会関係あるいは清朝崩壊後王公タイジが消滅した後の社会関係については未だ十分分析できていない。そもそも、清代およびそれ以後の一次史料は多くが行政文書の類であり、末端の社会関係を解明するには質量とも十分揃わない場合が多い。かかる史料的制約を乗り越え、清代から現代に至る通時代的社会像を構築することが大きな課題であると言える。

以上の研究状況をふまえ、本論では、フルンボイルの旧鑲白旗 (köbege dü çayan qosiyu。現在の中国内モンゴル自治区フルンボイル (呼倫貝爾) 市シン＝バルガ (新巴爾虎) 左旗) 出身の古老の口述をもとに、鑲白旗領内にかつて存在したアイマグ (ayimag) (注4) と呼ばれる小集団の組織編成や社会的機能を解明し、宿营地集団の外縁に広がる地縁的結合の在り方、さらにはかかる小集団が20世紀前半期を通じて社会の基層でいかに機能していたかを考察する。

対象とするフルンボイル地域は、1730年代、清朝雍正年間にフルンボイル八旗が設置されて

以降、基本的に副都統以下、総管、副総管らによって統治され（注5）、漠北ハルハの王公タイジに相当する支配者層が存在しなかった（注6）。すなわち、同地域を対象とすることで、王公タイジの親族集団が存在しない地域における社会結合を分析できるのであり、そこで抽出された社会像は、上述の漠北ハルハ地域の社会モデルを分析する上でも、重要な比較の視座となりうる。

また本論では、先述の史料的制約を越える試みとして、古老からの聞き取り内容を軸に論を展開する。もとより、口述内容を文献史料や現地調査で裏付ける作業は不可欠であるが、従来、このような地域内の地縁結合を正面から論じた研究は少なく、波及する論点も多岐にわたるため、本論では、議論の出発点として、古老の口述内容を正確にトレースすることに力点を置き、そこから読み取れるアイマグの基本構造や社会的機能および歴史的連続性の解明を第一の目的とする。現地調査や文書史料との詳細な照合は別稿において展開する予定である。

2. インフォーマントについて

2.1. Ya. シャーリーボー氏の経歴

シン＝バルガ鑲白旗の地域小集団アイマグについて最も詳細な口述を残したのが Ya. シャーリーボー氏（1910-2009）である。氏の口述内容が本論の重要な柱となるため、初めに紙数を割いて、氏の経歴および氏のアイマグの記憶が何歳の頃（何年代）の経験に基づくのかを考察する。

Ya. シャーリーボー氏の経歴は〔吉田 1999〕に詳しい。戦前戦後の東北アジア史を凝縮したような氏のライフヒストリーはそれだけで貴重な史資料であるが、ここでは論旨と関わる部分を中心に、〔吉田 1999〕に依拠しつつ氏の経歴をまとめる。なお筆者が氏から聞き取った内容も適宜注記していく。

氏は1910年生まれで（注7）、1922年から1925年まで、アムガラン（現在のシン＝バルガ左旗政庁が置かれている阿木古郎鎮）のモンゴル小学校で学び、卒業後は2年間遊牧に従事した。1927年、17歳の時にハイラル（海拉爾）に出て、フルンボイル学校（小学校教員を養成する私塾的な学校）に入学する。学校で学ぶ傍ら、フルンボイル副都統公署で4年間書記の仕事にも従事した。

1932年、フルンボイル地域は満洲国の興安北省に組み込まれた。満洲国軍への入隊を志した氏は、1932年から長春の執政府護軍教練班で学び、翌1933年3月、ハイラルの満洲国軍興安北省警備軍の軍官候補生となり8ヶ月の訓練を受けた。そして同警備軍の司令官ウルジン（烏爾金）の専属副官として1933年に来日し福井で行われた秋期陸軍大演習などを見学した。1934年7月には満洲国陸軍騎兵上尉となり、1935年1月のハルハ廟事件勃発の際には興安騎兵第七連隊第一中隊長として出動した。なお、この警備軍下にいた2年ほどの時期に、日本軍の軍事顧問から日本語を教わっている。また警備軍で任に就く傍ら、1934年から約3年間、王爺廟に設立された興安軍官学校の一期生として、同校の軍幹部養成の幹部科に学んだ。1937年に軍官学校を卒業後、同じ王爺廟に設けられた興安軍管区司令部で勤務した。1939年の所謂ノモンハン事件

(ハルハ河戦争)においてはハイラルと前線を結ぶ兵站任務に携わっていた。ノモンハン事件終結後興安北第十軍第八団長を務め、1943年から新京の陸軍高等軍事学校に第一期生として学んだが、翌1944年春頃に病気を理由に休学・休職した。

[吉田1999:46]に依れば、氏は1945年夏には体が回復したこともあって東シン＝バルガ旗の旗公署の総務科長として働いていたが、8月7日に満洲国軍の召集を受け、ハイラルに到着した所でソ連軍の侵攻に遭遇したという。しかし、筆者らの2001年の聞き取りに依れば、氏は1944年春の休職以後召集を受ける1945年8月7日まで、「在郷軍人」として郷里のシン＝バルガ鑲白旗で遊牧生活を送っており、「旗公署の総務科長」となるのは、ソ連軍侵攻後、元興安北省省長エルヘムバットの任命を受けてのことである(注8)。

氏はその後、1945年11月に、鑲白旗の人々を中心に約1,000人を率いてモンゴル人民共和国に移住を敢行し、移住後は、新設されたフルンボイル・ソムの初代ソム長に選ばれて、人民共和国側との折衝に尽力した。この移住からソム設置までの顛末は[シャーリーボー・ナムスライ1999]に詳しい。新ソムについては本論5.で再論する。1949年には「日本のスパイ」疑惑をかけられウランバートルで投獄されたが、日本語・満洲語に長け、チベット語や漢語にも通じていた氏は、後にモンゴル国立大学で教鞭を執ることになり多くの後進を育てた。

以上の氏の経歴から考えると、氏が最も長くシン＝バルガ鑲白旗で遊牧生活を送ったのは、出生から1927年17歳でハイラルの学校に入学するまで(途中アムガランでの3年間の就学を含む)の期間であった。その後、1944年春に休職するまで、氏は基本的に郷里の外におり、氏のアイマグの記憶は、基本的にこの1910-20年代の体験がベースになっていると思われる。

筆者が氏の面識を得たのは1999年で、以後ウランバートル市の氏の自宅において2006年まで継続的に聞き取りをしたが、アイマグについては2005年12月と2006年8月に集中的に聞き取りをおこなった。氏の記憶は部分的に曖昧な所もあり、特に自身の経歴については[吉田1999]で確認するよう求められたが、アイマグに関わる記憶は驚くほど明瞭で、口述も淀むところが多かった。氏自身その理由を、フルンボイル草原で過ごした若き遊牧民としての記憶はもっとも基層にあると述べ、郷里の人間関係を忘れる者はいない、アイマグとはそれくらい一般的なものと説明した。

この青年期以外では、1944年春から翌年夏までの休職期間、氏は郷里で遊牧生活をしていたという。筆者は、氏のアイマグの記憶がこの1年以上の郷里生活の時期に形成された可能性を考え、慎重に氏に確認した。というのも、これより前の1936-39年に興安北省で地方行政改革が行われており、社会への影響はほとんどなかったと言われる(注9)ものの、氏が語るアイマグが行政改革後のアイマグである場合、より慎重な行論が求められるからである。これに対し氏は、一貫して、アイマグが日本進出以前からの組織で、自分が少年時代からあったと強調し、アイマグと地方行政改革の関係を訪ねた際にも、氏は郷里にいなかったため不明であるが、帰郷後も地域社会が劇的に変化したことはなかったと述べた。この行政改革とアイマグの関係については別稿で検討を加える予定である。

最後に、氏のアイマグの記憶に関わる重要事件として、1945年のモンゴル人民共和国への移住を挙げておきたい。終戦直後の混乱期、氏は地域住民ら約1,000人を率いて移住を主導するのだが、本論5.で分析するように、氏は1945年の移住者個々の出身アイマグや家族構成などを詳細に記憶していた。その理由について氏は、移住後の初代ソム長に選ばれ、移住者ひとりひとりを把握する責任を負っていたからだと述べた。確かに、新たにフルンボイル=ソムを建置するに当たり、ソム長が個々人の所属や個々人間のつながりを正確に把握することは当然であり必然でもあったと考えられる。

以上を総合すると、氏のアイマグの記憶は、幼少から17歳頃までのいわば青年期の遊牧生活を通じた実体験として蓄積され、加えて1945年の終戦から移住、新ソム設置の苦勞を通して、さらに色濃く脳裏に焼き付けられたのだと考えられる。

2.2. その他のインフォーマント

シャーリーボー氏以外にもアイマグを記憶しているインフォーマントは存在する。そもそも筆者が初めてアイマグの存在を知ったのは、シャーリーボー氏と同じ鑲白旗出身で、ともに1945年にモンゴル人民共和国に移住してきたLh. アディヤ氏(1921-2001)への聞き取り調査においてであった。アディヤ氏は、1921年ハルハで生まれる(出生の背景については後述)。鑲白旗第三ソムの所属であったと言う。1930年代にはソムの書記を務め、1939年興安南省の国民高等学校に入学、1941年満洲国興安軍に入隊、病院などに勤務した。終戦後シャーリーボー氏らとともにモンゴル人民共和国に移住する。従って、氏のアイマグに関する記憶も18歳(1939年)までの郷里およびソム政庁での経験、そして1945年の移住時の経験に依っている。なお氏への聞き取り調査は、2000年8月にドルノド県チョイバルサン市の氏の自宅でおこなった(注10)。

また筆者は、現在の内モンゴル自治区フルンボイル市のシン=バルガ左旗においても、2007年、2008年に調査をおこなった。現地では60代のインフォーマントA氏の協力を得て、アイマグを知る現地の古老への聞き取りを依頼した。A氏は地域の歴史をよく知る人物で、2007年に筆者が初めて面識を得た時点で、すでにアイマグの組織や機能について一定の知識を有していた。A氏には、地元の古老らへのさらなる確認を依頼し、2008年に再度A氏から聞き取り調査を行った。A氏は、アイマグのことを知る70代、80代の古老2名を中心に確認を進めたというが、筆者はこの2名から直接話を聞くことはできなかった。またこの2007年、2008年の調査では、同地域の自然環境や中心的ランドマーク、各アイマグの地理的分布などを現地で確認した。詳細は別稿に譲るが、その調査結果は本論でも適宜ふれる。

またハイラルで刊行された郷土史[öljei et al. 2002]の中にも一部アイマグの記述が存在する。本論で詳細に検討するが、同書が典拠とした史料、インフォーマントについては記載がなく不明である。

3. アイマグの名称と分布

ではシン＝バルガ鑲白旗におけるアイマグについて、まずはその数と名称を整理する。数・名称とも各インフォーマント・文献史料によって異同がある。

まず研究の出発点となったアディヤ氏は、鑲白旗に存在したアイマグとして

①ホーリン（氏は綴りや意味は不明であるとした）

②西北

③東北

という3つの名前を挙げ、氏自身は西北アイマグの出身だと述べた。これ以外のアイマグ名は知らず、小規模なアイマグについても記憶はないと述べた。

次に、シン＝バルガ左旗在住のA氏は、古老から聞いたこととして、

①ホーロイ

②ウイゼンテン

③ゴリン

の3つのアイマグ名を挙げた。なおA氏は、この3つ以外のアイマグ名は知らないとするものの、次節で再論する如く、この3つよりも小規模なアイマグが存在し、地域集団として機能していたと口述している。

また鑲白旗の郷土史 [öljei et al. 2002 : 14] では、該旗が地理的に4つのアイマグに分かれていたとし、各アイマグの地理的範囲を以下のように記している（注11）。

①ホーロイ (qoγulai) : ガルバル山の南、グン＝ノールから北、ホルボー（シリシ＝ホルボー (sili-yin qolbuγ-a)）、ホーロイの地に散在。

②西北 (barayun qoyitu。別名ウイゼンテン (üidzengten)) : 満洲里からジャライ＝ノール（扎賚諾爾）、ボンホン、ダライの東側に領域を有する。

③ゴリン (youl-un) : バローン（西？）河の南側、タナ平原 (tan-a-yin tal-a)、ハブツァグ＝ホルボー、鉄道の両側に領域を有する（注12）。

④東北 (jegün qoyitu) : ハイラル河から北、エルグネ河の南側、東はムンフ＝シリ (sili)、ハロール＝ダワーまで散在し遊牧。

以上の口述・記述に共通するのは、アイマグが明確な領域を有し、旗を空間的に3つないし4つに分割する単位であった点である。名称と数に異同はあるが、アディヤ氏の「ホーリン」は

「ホーロイ」であり、「西北」と「ウイゼンテン」は同一アイマクであると考えられる。「東北」と「ゴリン」についてはやや複雑なため後段で考察する。

これに対して、シャーリーボー氏が挙げたアイマクの数をはるかに多い。聞き取り当初、氏が記憶のままに挙げたアイマクの数に14に上った。これらひとつずつ、地理的な特徴や分布、規模などを聞いていくと、14のアイマクには大小の階層性があることが確認できた。大アイマクをA～D、その下位の小アイマクを数字で識別し、氏の地理的解説を付記したものが以下である。

A ウルジート：山の名称。

B オールジン：山の名称。ダライ＝ノール（呼倫湖）の北にある。別名ウイゼンテン＝アイマクとも言う。

B-1：ボンホン（bungqun）

B-2：ボルガスト＝ツァガーン

B-3：エレーン＝ボルダラブ

C ホーロイ（qoyulai）：旗の東南にあった溪谷（jilay-a）。

C-1：バヤン＝ブルド

C-2：イフ＝ノール

D ハイラル＝ゴル：ハイラル河（ゴル）の両岸。

D-1：オンゴン＝ブルド

D-2：ハナン＝ハド

D-3：バガ＝オール

D-4：ボル＝ホシヨード

D-5：スーデルテン

A ウルジートはシャーリーボー氏の属したアイマクで、日本軍の要塞が築かれていた（注13）。ウルジートは30戸程度の小規模なアイマクであり、大規模なアイマクは、オールジン、ホーロイ、ハイラル＝ゴルの3つであったと述べた。ただし、氏はウルジートを他の3つの大アイマクからは独立したアイマクであると述べていたので、ここではそれに従って「A」として弁別した（注14）。

B オールジンについて氏は、別にウイゼンテンとも呼び、旗の西北部、ダライ湖の北岸に位置すると述べた。これを先の三者と照合すれば、「西北」「ウイゼンテン」「オールジン」は全て同一のアイマクを指していると考えられよう。

なお、ほぼ全てのアイマク名が地名や方角を冠しているのに対し、このアイマクだけは「ウイゼン」という人物名を冠した別称を持つ。氏はその理由について、彼らは元々オールジン山近くに遊牧する集団、すなわちオールジン＝アイマクだったが、ウイゼンというリーダーに率いられて

「巳年の4つの戦争」を避けるためにハルハへ移住し、7～8年後に故地に戻ったと述べた。「巳年の戦争」とは1917年シブシングによって起こされたフルンボイル地方の戦乱を指すと思われる（注15）。この戦乱を避けてシン＝バルガ左右翼の多くの民がハルハへと移住避難したが〔阿・恩克巴図ほか1994：52〕、鑲白旗からも91戸690人が避難したとの説がある（注16）。シャーリーボー氏の口述が正しいとすれば、彼ら避難民が故地に戻ってきたのは7～8年後、すなわち1924～25年頃である（注17）。ちなみに西北アイマグ出身のアディヤ氏は、1921年にハルハの地で生まれたというが、年代的には、まさにウイゼン率いる西北アイマグの人々がハルハに避難していた時期と符合する（注18）。

C ホーロイは、アディヤ氏の言う「ホーリン」であろう。シャーリーボー氏、A氏とも、〔öljei et al. 2002：14〕と同様、ホーロイの綴りは「qoyulai」だと述べた。ホーロイは、旗の南部、ハイラル河南岸に広がる小砂丘帯および低湿な平原を指すと思われる（注19）。

D ハイラル＝ゴル（河）は、A氏および〔öljei et al. 2002：14〕が述べる「ゴリン（河の）＝アイマグ」で間違いはないが、以下で検討するように、集団の範囲については相互に多少異なる可能性が考えられる。

「東北アイマグ」については、シャーリーボー氏、A氏とも存在を知らないという。前掲〔öljei et al. 2002：14〕の解説では、ハイラル河の北岸が「東北アイマグ」、南岸・鉄道沿線が「ゴリン＝アイマグ」のように読める。また〔öljei et al. 2002：247〕では、ハイラル河北岸の重要なランドマークで、旗全体の祭祀対象であるイフ＝オールという山は、元々「東北アイマグ」の人々が祭っていた山であり、イフ＝オールの祭祀時には近隣のバガ＝オール（D-3）も同時に祭る習慣だったと記す。つまり、「東北アイマグ」はイフ＝オール、バガ＝オール（D-3）を中心とするハイラル河北岸の集団を指す可能性が考えられる。

これに対して、シャーリーボー氏が述べるD ハイラル＝ゴル＝アイマグについては、現地調査で、D-2からD-4がハイラル河北岸に、D-1とD-5が南岸に位置していることが確認され、南北両岸の集団を包摂する概念だったことがわかる。詳細は不明ながら、シャーリーボー氏の言うハイラル＝ゴル＝アイマグ（D）は、〔öljei et al. 2002：14〕が言う「東北」（北岸）と「ゴリン」（南岸）の両アイマグを併せたアイマグであった可能性が高い（注20）。

いずれにせよ、鑲白旗では、旗やソムといった行政組織とは別に、方位（西北、東北）や特徴的な地形（峡、河など）の名を冠し、旗内を地理的に3乃至4つのエリアに大別するアイマグという集団が存在したことがわかる。そのエリアは、旗の中心を流れるハイラル河周辺と、河の南側に広がる砂丘・平原地帯、旗の西側ダライ湖北岸に接続する地域である。

またシャーリーボー氏の口述からは、これら3～4の大アイマグの下に、より小規模な地域集団が同じくアイマグと呼ばれて存在した可能性が浮上した。次に考察すべきは、このような大小のアイマグが、単に漠然と旗内を区分する呼称にとどまらず、「集団」と呼び得るほどの社会的機能を有していたかという点であろう。以下にアイマグの集団編成や社会的機能を確認していく。

4. アイマクの編成と社会的機能

4.1. 小アイマクの規模と社会的機能

アイマクの編成や社会的機能について [öljei et al. 2002] には言及がない。口述のうち最も詳細であったのはシャーリーボー氏である。以下、氏の口述を中心に、アディヤ氏や A 氏の口述を適宜補いながら、アイマクの編成・機能について述べていく。

シャーリーボー氏によれば、小アイマクは平均 10-20 戸で最大でも 30 戸程度であったという。また、旗全体は 200 から 300 戸程度で、1 ソムは約 60~70 戸なので、小アイマクはソムよりも小さな組織である、と述べた。実際、鑲白旗の総戸数は 1938 年頃の統計で 270~300 戸程、1 ソムあたり 100 戸前後である (注 21)。氏が述べるとおり、10~30 戸の小アイマクが 11 あったとすれば、数的には概ね合致する。

氏は、日常の互助活動や社会活動はこの小アイマクが単位となっていたと認識しており、以下の各項で述べる社会的機能などは、全て小アイマクの話であることを確認している。A 氏も、アイマク名こそ 3 つの大アイマクの名しか挙げなかったが、後述の如き日常の互助活動は 10 数戸から成る小規模な単位で行われていたと述べた。大アイマクの機能や小アイマクとの関係は最後に論じるとして、以下に、このような 10~30 戸の小アイマクが果たした社会的機能について検討する。

シャーリーボー氏、アディヤ氏とも、アイマクが公式の行政組織ではなく、非公式な組織 (qubi-yin jokiyān bayiyulūta) であると強調していた。ソムのような行政組織とは異なり、アイマクは、居住地ごとにまとまり、遊牧生活における作業を共同で行う組織であるとする。シャーリーボー氏は、アイマク単位でおこなった共同作業として、第一に季節移動 (negüdel) や物資の輸送 (tegegebüri) を挙げたほか、干し草 (qadulang) や燃料となる柳 (buryasu) ・石炭 (negüresü) の調達、失踪した家畜の搜索などを挙げた。

このうち季節移動については、フルンボイル地域の降雪量が多いため、秋のうちから越冬に必要な営地を複数選定し囲いや燃料などを入念に準備し、冬期にはそれら営地を次々に代え、頻繁に移動を繰り返すことで冬を乗り切ったと述べた (注 22)。

また A 氏も、アイマクの最も重要な機能としてこの越冬を挙げ、その様子を以下の如く詳細に語った。まずアイマクにはリーダー (後述のダルガ) 以外に「ズブルクチ (相談役、助言者)」や数名の「ノタクチン (土地案内人)」がおり、特に「ノタクチン」は日頃から遠近問わず多くの牧地の状況を把握しておき、その時の気象や牧草の生育状況などを勘案しアイマク全体の営地を決定していく。特に越冬は最も難しく、アイマク全体で頻繁な移動を繰り返すため、次の営地までの移動順 (誰をどの順番で出発させるか) や、移動ルート上に予め何を準備しておくかなど、綿密かつ的確に計画し指示する必要があった。アイマク構成員が移動時に守るべき細かい規則 (jirum。例えば、後続者のために必ず家畜囲いを修繕し燃料の畜糞を集めておくことなど) も定められていたという。

アイマクの組織形態や機能が、冬季の多雪とそれにより強いられる頻繁な移動というフルンボイル地域の環境要因に規定されている点は注目すべきである。詳細は別稿で論じるが、現地において、11の小アイマク名とそれぞれの土地の特徴・利用状況などを調査した際、A氏および現地の牧民は、これら11アイマクの地名の多くが夏営地であると答えた。事実、その地名の多くが河や湖・泉など水場にちなんだ名前である。冬を乗り越えるための集団が夏営地を核に集団意識を形成していたことは、今後、モンゴル遊牧社会における集団形成を考える上で示唆的である。これについては本論末で再論する。

如上の遊牧作業以外に、冠婚葬祭などもアイマク単位で行ったという。事前の布告から式の進行、飲食物の提供までアイマク構成員が協力して取り仕切った。またアイマクでは、喧嘩の仲裁など軽微な事件も処理していた。もちろん、大きな事件はソムの役人が法に則って処分を下すが、軽微な案件はアイマク内、あるいはアイマク間で調停・処理するなど行政や司法を補完する機能もあったという。また、アイマクごとに学校を建設する動きがあり、アイマクの中心に固定家屋を建設した所もあったようだが、氏自身が郷里を離れていた時期でもあり、年代や設置の背景についてはわからないと述べた。

4.2. 小アイマクの運営

以上の如く、アイマク単位でおこなう活動は生活全般から行政・司法の補完まで多岐に及ぶ。通常これらの諸問題は、アイマクのダルガ (daruy-a. リーダー) の指示の下、アイマク構成員による集会 (qural, yarılcay-a) で協議し決定されたという。ダルガは主に年長者が選ばれ、学歴や血筋、任官歴の有無とは関係なく、遊牧の経験豊富な人格者が選ばれる傾向にあったという。例えば、シャーリーボー氏が所属したAウルジート=アイマクには氏のような外国語に長け官吏経験もある知識人や、チメド=ザンギと言う世襲佐領がいたが、アイマクのダルガは別にソムという年長者が務めたという。ほかにもボル=ホショード=アイマク (D-4) には、旧第一ソムのソム章京を務めた世襲佐領チメドがいたが、アイマクのダルガはセンゲという年長者だったという (注23)。A氏もまた、ダルガが官員である必要はなく、遊牧に長じ人々からの信頼の厚い人格者になったと述べた。

すなわち、総管衙門や旗、ソムといった正規の行政組織が、それに応じたヒエラルキー (職階や爵階) によって動いていたのに対し、アイマクは全く異なるヒエラルキーによって運営されており、ダルガに求められた能力も、遊牧生活を円滑かつ安全に行うための知識と経験、そして時に司法制度を末端で補完しうる調整力や他者からの信頼などであったことがわかる。

次に、アイマクの構成員について検討する。まず、アイマクに加入するための手続きは至極簡単で、「ジャス」と呼ばれるアイマクの共同管理畜群に5~10頭の家畜を供出すれば良かったという。この畜群はダルガが管理し冠婚葬祭などに使う。アイマクからの脱退も特に条件は無く、脱退の際にはジャスに供出した家畜も返還されたという。

しかし、実際に構成員の出入りがどれほどあったのかを尋ねると、生まれた子供は基本的に両

親のアイマクに属しそのまま成長するため、親兄弟や近い親族が同一アイマクにいるケースが多く、構成員の出入りは少なかった。ただし女性については、結婚と同時に夫のアイマクに入る場合が多かったと述べた。つまり、アイマクとは、第一義的には同じ牧地を共有し、地形や地名に依ってアイデンティファイされる地縁結合と定義できるが、結果として、構成員相互がごく近い父系・男系の血縁関係にある例も多かったと想定できる。

また、構成員には、春夏秋冬のアイマクの営地を共にする義務があったわけではないという。旗民は旗内であればどこでも宿営可能であり、旗外に遊牧することもあった。また例えば、他のアイマクの間がウルジート山周辺で遊牧を行うことも可能で、その場合はウルジート=アイマクのダルガに挨拶するだけで良く、所属アイマクを変更したりウルジート=アイマクの集会に出たりする必要はない。逆にウルジート山周辺で生活していても、自身の所属アイマクの集会には参加する義務があった。

4.3. 大アイマクの機能について

以上、小アイマクの社会的機能や組織を見てきたが、大アイマクについてはなおその位置づけが不明な点がある。行論の都合上、紙幅は割けないが、現時点での考察を加え今後の課題を提示しておきたい。

大アイマクを考える上で手がかりとなるのは、旗の行政組織とオボー祭祀（注24）の在り方であるとする。まず行政について考察する。旗の行政はソムを単位として行われる。たとえば徴税について、シャーリーボー氏によれば、旗の負担はまずソムごとに割り当てられ、ソムでは、その負担を所有家畜数に応じて各個人に割り当てる。実際の徴収は領催（kögegçi）らソム官吏が直接各牧民宅へ赴き徴収したという。ソムには決まった領域はなく、各アイマクの中には第一～三までのソム構成員が混じっていたと述べた。

アディヤ氏の口述もほぼ同様であった。すなわち、徴税はソム単位で行われたが、ソムには領域がないため、各ソムの徴税担当官はそれぞれ全旗・全アイマクを巡ってソム所属民から徴収していたと述べた。例えば、アディヤ氏は第三ソムの間であったが、所属する西北アイマクには第一から第三までのソム出身者がいたと述べた。

三ソムの各担当官が別々に旗全域の全アイマクを回る制度は、一見、煩瑣で非効率のようにも思われるが、シャーリーボー氏は、旗の端から端まで20～30 km程度であること、また誰がどのアイマクに属しているかは旗民相互が良く知っていたことなどから、別段徴収に手を焼くことはなかったと述べた。

一見形骸化した組織のように思えるソムであるが、実は、ソムにはもうひとつ祭祀集団の側面を有していた。[öljei et al. 2002: 245-249]には、鑲白旗全体で祭るオボーとして、バヤン=ツァガンと先述のイフ=オールが、次いで、各ソム、一族（hala）で祭るオボー、家族など小規模な単位で祭るオボーが紹介されている（注25）。またシャーリーボー氏は、オボー祭祀には、旗、ソム、一族（hala）のほか、一部のアイマクではアイマク単位でのオボー祭祀を行っていたと述べた。

ソムが祭っていたオボーは両者で一致している。第一ソムがボンホティン＝オボー（1932年からウルジート＝オボーと交代で祭る）、第二ソムがエルデネ＝オボー、第三ソムがアサリン＝オボーである。それぞれ旗の中心地ツァガーン（察罕、嵯崗）駅から見て、ボンホティン、ウルジートは西、エルデネは南、アサリンが東南に位置する。

興味深いのは、シャーリーボー氏が挙げた以下のアイマクの祭祀対象である。

A ウルジート：ウルジート山のオボーを祭る。

B オールジン：ノゴーン＝ハブスガイト。別名ドライ＝オールを祭る。

C ホーロイ：アサリン＝オボーを祭る。

D-1 オンゴン＝ブルド：オンゴン＝ブルドのオボーを祭る。

D-1を除き、B オールジン、C ホーロイという大アイマクが祭祀単位であった点は注目される。そして、この大アイマクの祭祀対象は、ソムの祭祀対象と緩やかな対応関係にある。すなわち、第一ソムのウルジート＝オボーはA ウルジート＝アイマク、ボンホティン＝オボーはB-1 ボンホン＝アイマクの地に対応し、第三ソムのアサリン＝オボーはC ホーロイ＝アイマクに対応する（第二ソムのエルデネ＝オボーがどのアイマクと対応するかは不明である）。

つまり、該旗を地理的に分かつ際、旗の中心を流れるハイラル河周辺と、河の南側に広がる砂丘・平原地域、ドライ湖北岸地域の3地域は、恐らく、地形的特徴や遊牧時の土地利用の在り方などから、自然に分かたれるべき差異を有しているのだと思われる（注26）。史料的制約から推論の域を出ないが、ソムもまた、大アイマクと同様、本来は（1730年代の旗設置当初は）旗を如上の地域に3分する地縁組織的側面を持っていたのではなかろうか。大アイマクに対応する形で、ソムのオボーが存在することは、何よりの証左であろう。

20世紀の時点でソムの地縁的側面が一切消失しているのは、清代の統治制度に由来するだろう。清代では、ソム構成員は基本的に比丁冊などで管理され、所属ソムを自由に変更することはできなかつたと考えられる〔中村2011〕。他方、居住地や牧地は比較的自由に変えられたと思われる。200年近い月日が経過した後であれば、ソムの当初の地縁組織的性格が一切消えているのも無理はあるまい。

反対に、大アイマクの区分は、自然地形や遊牧形態の差、特徴的ランドマークによって生成され、恐らく18世紀のソム設置以降一貫して旗全体を分かつ指標であり続けた。その集団意識が毎年のオボー祭祀によって再生産されるなど、社会生活に根ざした部分もある一方、小アイマクのような緊密な共同関係や社会的機能は見受けられない。時に、西北・東北などの方角で呼び換えられているように、大アイマクとは、大雑把に旗内で自他を識別する単位集団であり、互いの居住地を識別する際の一種の符牒のようなものだったと考えられよう。

行論の都合上、これ以上の検証は別稿に譲るが、大小のアイマクが地形や生業に規定され生成される組織だとすれば、鑲白旗以外の遊牧地域にも広く見られて良い。シャーリーボー氏に依れ

ば、ブリヤートにはアイマクはないが、ホーチン＝バルガ（陳巴爾虎）やソロン（索倫）にはあったとする。ソロンの場合、フイ（河）、シベ（河）、イミン（河）という河の名前を冠したアイマクがあったように思う、と述べた。また A 氏は、正白旗にもアイマクがあったが地名ではなく人名を冠していたと述べた。鑲黃旗でもアイマクが存在したようである。今後の課題とする。

5. 1945 年の移住者名簿と所属アイマク

以上まとめたように、アイマクは遊牧生活に根ざした地縁的組織ないしは自他を識別する社会の基層単位であった。であるならば、多くの場面でアイマクを基盤とする集団編成が見られるべきであろう。調査の過程でシャーリーボー氏は、1945 年モンゴル人民共和国への移住後、新ソムの設立時にも概ねアイマクごとに新たなバグを編成したと述べた。これが事実であれば、アイマクは、氏の青年期（1920 年代）から少なくとも 1940 年代まで一貫して該旗の基層単位として機能していたことが確認できる。

そこで、1945 年の移住者名簿をもとに、移住者個々人の所属アイマクを氏がどれほど記憶しているか尋ねることとした。移住者名簿とは、[シャーリーボー・ナムスライ 1999] の巻末 [同：79-87] に添付された「フルンボイル＝ソムの 1946 年の人口・家畜数（хүн малын тоо）」と名付けられた名簿のことである。名簿には、移住した計 256 戸の戸主名および各戸の家族数（ам бүл）・家畜数（малын тоо）および姓（овог хал）が記されている。戸主名はナンバリングされており、No. 130 と No. 131 の間に「第三バグ」、No. 194 と No. 195 の間に「第四バグ」と書かれていることから、第一から第四までのバグ順にまとめられた表である（注 27）ことが確認できる。

本文中、この名簿についての解説は無いが、新ソムの設置と名簿作成までの経緯を [シャーリーボー・ナムスライ 1999：62-67] に従って簡潔にまとめてみる。1945 年 11 月、モンゴル人民共和国への移住を執行したシン＝バルガ鑲白旗人を中心とする約 1,000 人は、移住後速やかにソムに編成される。移住民らによる選挙を経てシャーリーボー氏が初代ソム長に選出され、ソム下に 3 つのバグを作ることとなった。翌 1946 年、現在のモンゴル国ドルノド県フルンボイル＝ソムの地にソムを作ることとなり、1 月から移動を開始し、4 月末に正式にソムの設置が認可され、管下のバグもひとつ増えて 4 つとすることが決まった。7 月初め内務省の役人が来て正式な戸口家畜数を調査し、256 戸（орх）、954 人（хүн）、家畜 74,865 頭を登録したという [同：67]（注 28）。これに対し、巻末名簿は 947 人、家畜 70,985 頭とやや異なるが、4 バグ、256 戸であることから、この名簿が 1946 年 7 月の調査時（ないしはその前後）に作成されたと考えられる。

シャーリーボー氏への聞き取りは、名簿の戸主計 256 名を順に読み上げ、所属アイマクを聞いていく方法でおこなった。氏が名前だけで識別できない場合には、家族数・家畜数・姓なども読み上げたが、氏は大部分は名前だけで個人を識別でき、所属アイマクに関しても淀みなく答えていった。その結果をまとめたものが本論末尾の【表：1946 年フルンボイル＝ソム構成員の所属

アイマグ】である。

人名のカタカナ表記は〔シャーリーポー・ナムスライ 1999 : 79-87〕の吉田氏らの訳に従った。また家族数と家畜数のバグごとの小計とソム全体の総計を新たに加えた。氏が回答したアイマグ名は「所属アイマグ」の列に記した。移住民の中には鑲白旗以外に、鑲黄旗や正白旗のバルガ族、ホーチン＝バルガやブリヤート、漢人などもいたが、便宜上まとめて「所属アイマグ」欄に記した（注 29）。

また、聞き取り調査中に氏が指摘した名前の記載ミスや、戸の状況（家畜数や家族数、家族関係など）を「その他コメント」に記した。「※」は戸下の家族数を氏が正確に言い当てたことを示す。また氏は特に多くの家畜を所有する富裕者に言及することが多かった。氏が「多くの家畜を持っていた」「1,000 頭を越える家畜を持っていた」などと述べた人物（表中「家畜持ち」と記した）は、No. 226 を除けば皆確かに 400～1,000 頭を越える多数の家畜を持っており、氏の記憶と符合していた。

所属アイマグについて、氏が全く答えられなかった人物は No. 99 と No. 188 の 2 人だけであった。また氏が答えたアイマグは「ハイラル」や「オールジン」など大アイマグがほとんどで、下位の小アイマグのいずれかに属していたかまでは記憶が無かった。ただし、後掲【表：1946 年新設フルンボイル＝ソムにおける各バグの状況】に記したとおり、氏とともに新ソムの官吏となったユルルトやジャンバル、フーヒンテイについては、出身の小アイマグまで記憶していた。氏に確認したところ、皆いずれかの小アイマグに属しており、往時は所属の小アイマグまで覚えていたとのことであった。

小アイマグの記憶は曖昧だったとはいえ、聞き取り調査当時 96 歳を迎えていた氏が、200 名以上の所属大アイマグを忘れていなかったのは、氏のずば抜けた記憶力以外に、新ソムの組織編成とアイマグが深く関わっていたからだと思われる。移住者たちは 1945 年 11 月の移住決行後すぐに 3 つのバグに編成され、さらに翌年 4 月には 4 バグへと改編されているが、バグの編成がなぜこのような短時日の内に可能であったのかを氏に尋ねると、氏は大略以下のように答えた。

新ソムのバグは、姓（オボグ）・遊牧地（ノタク）・知り合い（タニル）の近い者同士で編成する方針としたので、必然的にアイマグが同じ者同士でバグを作ることになった。アイマグ毎にまとめていったために、バグの編成は簡単で特に不平もなくすぐに決定することができた。決定後も所属バグの変更希望を募ったが、希望者はほとんど出なかった。

そこで、氏に、実際にどのバグがどのアイマグと対応するかを尋ねると、以下のように説明した。

- 鑲白旗のうち、オールジンとウルジート＝アイマグはほぼ全員が移住してきたが、ホーロイとハイラル＝ゴル＝アイマグは一部が残った。
- 第一バグはウルジート＝アイマグ出身者で構成し、そこに正白旗出身者を加えた。
- 第二バグはホーロイ＝アイマグとハイラル＝ゴル＝アイマグ出身者（多くは D-1 オンゴン

=ブルドの人々)で構成した。

- 第三バグは主にオールジン=アイマク出身者(多くはB-1 ボンホンの人々)から構成されたが、1946年で4バグ体制になると、バグ長フーヒンテイ(B-1 ボンホン出身)らが改めて第四バグに移った。
- 第四バグは、フーヒンテイらのほか、各バグから寄せ集めて編成した。

この口述内容を裏付けるために、移住者名簿を所属アイマクごとに集計したのが以下の【表：1946年新設フルンボイル=ソムにおける各バグの状況】である。4.2.で述べたように、家族は基本的に戸主のアイマクに属すると考えられるため、戸下の全員が戸主と同一バグに所属したとして計算した。また、バグ官吏について、氏が述べた出身アイマクなどの情報を表中に書き入れた。記憶が曖昧だったのは第二副バグ長と第四バグ書記であったが、表中から可能性の高い人物を同定した(注30)。

表 1946年新設フルンボイル=ソムにおける各バグの状況

バグ	バグ長および官吏	戸口・家畜数	アイマク別人数
第一バグ	長：ラバーンチュヘル(No. 42。正白旗。旧左旗課長) 副長：ツェベーンソドノム(No. 31。正白旗) 書記：バヤル(No. 2。ウルジート)	64戸 246人 16,859頭	ウルジート 27戸 92人 正白旗 23戸 103人 ハイラル 9戸 34人 その他 5戸 17人
第二バグ	長：ユルールト(No. 65。D-1 オンゴン=ブルド(ハイラル)。旧第三ソム章京) 副長：バータル(No. 66 ?ハイラル) 書記：ジャンバル(No. 96。C-2 イフ=ノール(ホーロイ)。旧ソム章京)	66戸 261人 17,405頭	ホーロイ 34戸 137人 ハイラル 29戸 118人 その他 3戸 7人
第三バグ	長：ツェベーン(No. 162。オールジン。元軍人で少尉) 副長：エルデームー(No. 191。オールジン) 書記：ノロブ(No. 132。ホーロイ)	64戸 220人 20,684頭	オールジン 51戸 183人 ハイラル 7戸 18人 ホーロイ 3戸 9人 その他 3戸 10人
第四バグ	長：フーヒンテイ(No. 225。B-1 ボンホン(オールジン)。分割前の第三バグ長。旧第二ソム領催) 副長：バザラグチャー(No. 243。オールジン) 書記：ゴンボスレン(No. 204か206 ?オールジン)	62戸 220人 16,037頭	ハイラル 26戸 87人 オールジン 24戸 87人 ホーロイ 8戸 36人 その他 4戸 10人

表を見ると、確かに、第一バグはウルジート=アイマクと正白旗出身者がほぼ同数ずつで、第二バグはホーロイとハイラル=ゴル出身者がほぼ同数ずつ、第三バグはほぼオールジン出身者からなる。第四バグはハイラルとオールジンが多いものの、ホーロイも含め3アイマクが混在した編成になっており、これらはいずれも氏の口述内容と完全に符合する。またバグ官吏の構成も、概ね管下の各アイマクを代表する形になっていると言えよう(注31)。

また、氏は自身が所属するウルジート=アイマクは30戸程度の規模であったと述べているが、実際にウルジート所属民は27戸92人であり、数的に一致する。すなわち、ウルジート=アイマ

グは、氏の口述どおりアイマグ構成員ほぼ全員で一致して移住し、移住後もまとまって第一バグに編成され生活していたことになる。

その他のアイマグについては、氏が移住者全員の所属小アイマグまで覚えていなかったため、推測の域を出ないが以下に検討してみる。まず、B オールジンであるが、氏の口述が正しければ、ウルジート同様、アイマグ構成員ほぼ全員で移住し、移住後もまとまって第三バグを構成していたことになる。後の四バグ体制になった際、フーヒンテイ率いる一部が第四バグに移ったというが、実際、第一、第二バグにオールジン出身者はおらず、氏の口述を裏付ける。

この、第四バグに移った24戸87人は、フーヒンテイ以下ボンホン＝アイマグ(B-1)の人々だったと考えられるが、氏は確言しなかった。ただし、第三バグに残った構成員は51戸183人であり、残るB-2とB-3も大体B-1と同規模の20数戸の集団だったと仮定すれば、数的には辻褄が合う。

C ホーロイは第二から第四、D ハイラルは全てのバグに存在する。規模も、10戸未満から30戸程まで幅広い。氏の言う「小アイマグは平均10-20戸程度」という規模と大体は合致するが、資料的制約からこれ以上の分析は難しい。後考に期したい。

いずれにせよ、移住前の鑲白旗で構築されていたアイマグ単位の連帯関係が、移住決行時にも機能し、移住後も、アイマグを基本的単位集団として新ソム下のバグ編成が進められた事例が確認できた(注32)。

6. おわりに

以上、シャーリーボー氏への聞き取り調査を中心に1910-40年代フルンボイルのシン＝バルガ鑲白旗に存在した地域内小集団アイマグについて分析してきた。本論で得られた知見はおおよそ以下のとおりである。

シャーリーボー氏のアイマグの記憶は、基本的に出生から1927年、17歳の時にハイラルに出るまでの郷里での遊牧生活に基づくが、1945年秋のモンゴル人民共和国移住から新フルンボイル＝ソム設置の過程で、初代ソム長として移住民の把握に努めた経験が、氏の記憶を一層強化したと思われる。

1910-40年代の鑲白旗には、ソムなどの行政組織とは別に、方位(西北、東北)や特徴的な地形(オポー、峡、河)によって識別されるアイマグと呼ばれる集団が存在した。アイマグは旗内を地理的に3乃至4つに分ける大アイマグと、その下位のさらに小規模なアイマグが存在しており、大小合わせて14のアイマグ名が確認された。

大アイマグは、旗の中心を流れるハイラル河周辺地域、河の南側に広がる砂丘・平原地域、旗の西側ダライ湖北岸に接続する地域に大別されるが、この3地域は、地形や景観、遊牧時の土地利用なども相当異なると考えられ、旗全体を分かち指標になったと考えられる。大アイマグには、小アイマグのような日常的機能は存在しないが、オポー祭祀によって集団意識を更新していたと

考えられ、旗内で大雑把に自他を識別する単位集団であったと考えられる。

これに対し、小アイマグは10-20戸程度の小集団で、地名を冠していることから明らかなように、牧地を同じくする人々によって形成された地縁的組織と考えられる。小アイマグは、季節移動（特に頻繁かつ広範囲の移動を迫られる冬季の移動）や、日常の遊牧生活における互助を主とする組織であるが、時に軽微な犯罪や紛争の処理もおこなうなど行政や司法を補完する働きもした。アイマグはダルガ（長）によって統率され、種々の問題は集会での合議により決定された。ダルガは有職者や有爵者である必要はなく、遊牧の知識や経験が豊かな年長者が選ばれることが多かった。このダルガの人選が端的に示すように、小アイマグはあくまで遊牧生活の必要から生み出された地縁的協同組織であったことがわかる。

また、1945年にシャーリーボー氏らに率いられた鑲白旗人ら約1,000人がモンゴル人民共和国に移住したが、氏が所属したウルジート＝アイマグは構成員全員で移住し、移住後に新ソムを編成する際にも全員が同じ第一バグに編入されるなど、アイマグを基本的帰属単位とする社会構成は、移住後の社会にも一部継承されていったと考えられる。

以上が本論の要点である。今後なお文書史料や現地調査などによる検証が必要であるが、本論で得られた知見から今後いかなる課題が抽出できるのだろうか。以下に整理したい。

まずは遊牧社会における自然環境と遊牧形態、社会構造の相互関係についてである。従来から、自然環境と遊牧形態の関係性については研究蓄積があり、主に土地の高低、寒暖、水場という三要素の組み合わせで説明されてきた（例えば、夏は低地の河川付近、冬は風雪を凌ぐ山間に移動するといったパターンモデルである。[吉田1984]など）。フルンボイル地域についても、多雪という環境要素が頻繁な冬季の移動に結びついたとの指摘はある（前掲注22）。

しかし、アイマグの事例が投げかけるのは、このような自然環境と遊牧形態の在り方が、社会関係や基層組織の在り方、集団意識の形成にいかにかかわるか、という問題である。鑲白旗の事例をあえて単純化すれば、冬季の頻繁な移動が、結果として小アイマグという組織形態を生み出し、夏営地を核とする集団意識の形成に結びついているのである。

無論、実際の集団形成がこのような単純な因果関係で説明できないことは、本論で見たとおりである。集団の核となっているのは、オボーなどの特徴的ランドマークであったり、「ウイゼン」のような歴史的人物であったりする。数ある夏営地のなかで何が集団の核として選ばれるのか、ある土地が、日常の遊牧や祭祀を通じて、いかに集団の核たるランドマークになっていくのか、そのメカニズムについても不明な点が多い。

また、彼らの空間認識そして集団意識には複雑な階層性があることが明らかになった。本論では、便宜上アイマグのレベルを大小の二層に設定し分析したが、ハイラル＝ゴル＝アイマグが河の南北岸でさらに二分される可能性があるように（前掲注20参照）、またウルジート＝アイマグがオールジン＝アイマグに包摂されるとの見方があるように（前掲注14参照）、人々が持つ地域概念あるいは集団意識はさらに幾層かに分けることができる。そして当然ながら、その階層構造は、旗全体である程度共有されつつも、話者個々人の立ち位置によって少しずつずれていると思

われる（例えば、3つの大アイマクとその地域区分はほぼ全旗民に共有される構造であるのに対し、オールジンとウルジートの関係（階層なのか独立なのか）は、別のアイマクの間にとってさほど重要ではない）。宿营地集団レベルの分析も重要であるが、より広域の自然環境や地形に規定されたかかる階層構造の問題は今後さらに議論されるべきだろう。

また歴史学においても、かかる階層性を考慮する必要があるだろう。王公の親族集団による旗支配は、遊牧民の階層構造のどのレベルになるのだろうか。本論で言う大アイマク・レベルなのか、小アイマクの機能も有したのか。それによって社会史的意味や歴史的評価は大きく変わるだろう。

無論、鑲白旗のアイマク自体についてもまだ未解明な点は多い。アイマクの分布とその地理的特徴、そして満洲国時代の行政改革（前掲注9、21参照）とアイマクの関係については、慎重に検討を加えねばならない。今後の課題としたい。

注

- (1) 例えば、日本の代表的研究だけでも〔小貫 1985、尾崎 1996；1999；2000；2003、風戸 2009、日野 2001〕がある。なお「宿营地集団」という名称は〔小長谷 1996〕に依った。
- (2) 隣接する宿营地集団同士で家畜を預けあうサーハルトと呼ばれる関係については〔利光 1986〕が、また地方中心都市との関係については〔尾崎 1999〕があるが、より広域で、多くの宿营地集団が結びつく地域結合については、〔日野 2001：122〕がその存在を示唆するのみで十分な研究はない。
- (3) ハルハでは「オトグ (otuy)」や「バグ (bay)」〔岡 2007：195-216、中村 2003：10〕、内モンゴルでは「ノタグ (nutay)」〔ブレンサイン 2003：35、50、橘 2011：301、325〕と呼ばれる集団の存在が報告されている。
- (4) アイマクは、清代で「部・部落」と漢訳され、比較的大規模な部族集団を指す。漠北ハルハ四部や漠南のホルチン、ハラチンなどの諸部が該当する。またフルンボイル地域では、例えばバルガ族が自らのエスニック・グループを「アイマク」と呼ぶ例がある（例えば、シン＝バルガ出身で興安北省長などを歴任したエルヘムバット〔額爾欽巴図、1882-1951〕が1945年に著した『バルガ部簡史』(*Baryu ayimay-un tobči teüke*)）。その後、中華人民共和国内蒙古自治区では、広域行政単位である盟がアイマクと呼称されたため、現地で「アイマク」と言えば通常、この「フルンボイル盟 (アイマク)」のことと理解された（2001年に盟を市に改編し、現在はフルンボイル市となっている）。他方、モンゴル人民共和国および現在のモンゴル国でも、広域の地方行政単位（日本の県に相当）がアイマクと呼ばれる。それに対し本論で論じるアイマクは、特に注記の無い限り、後述する旗（ないし末端の行政単位）より下位に形成された小規模な地縁的集団を指すこととする。
- (5) バルガのフルンボイル移住およびフルンボイルにおける八旗制施行の経緯、その歴史的意義については〔柳澤 1993；1995；1997；1999〕がある。
- (6) 1939年に現地調査をおこなったハーフンガ（哈豊阿）は、フルンボイル八旗では、驍騎校以上の官吏が全て皇帝引見を経て任命され、披甲に至るまで国庫より年俸が払われること、副都統以下指揮系統が一元的であることなどから、王公タイジを支配層とする一般の旗（所謂ザサグ旗）と比べ、より直接的に清朝に隷属していたと述べる〔哈豊阿 1941：29〕。また、バルガにも清朝服属時の首領の後裔が「世襲佐領」として地位を継承していたが、随丁もなく、旗民への徴税権もなく、その一族にも何ら特権はなかったことなどから、王公タイジのような支配的身分階級を構成しなかったとする〔哈豊阿 1941：35-38〕。
- (7) 氏の口述に依れば、氏は当時のシン＝バルガ左翼鑲白旗 (*köbegetü čayan qosiyu*) 第一ソムに所属した。
- (8) 聞き取りは田淵陽子氏と合同で行った。ソ連侵攻後の氏およびエルヘムバットの動向については〔田淵 2014〕を参照。
- (9) この行政改革は遊牧地域にトスゴン（村）を設置しようとするもので、鑲白旗には12のトスゴンが設置された〔öljeimorutu 1985：39-45、duyarjab 1995：5-6〕に詳しい。〔öljeimorutu 1985：39-45〕に依れば、このトスゴン設置の動きは、翌1939年の所謂ノモンハン戦争の影響もあってすぐに頓挫し社会的には何らの影響もなかったとする。後述の如くシャーリーボー氏も同意見であった。ただし筆者は、この12のトスゴンが基層社会の

アイマクに基づいて作られたと考えている。詳細は別稿にて論じる予定である。

- (10) なお吉田氏も 2000 年に氏から遊牧習慣に関する聞き取りを実施している [吉田 2002: 86]。
- (11) 同書では、アイマクのまとまった記述はこの頁のみであり、アイマクをあくまで旗を地理的に大別するものと理解している。社会的機能などへの言及はない。
- (12) 同旗領内にはハルピンと満洲里を結ぶ鉄道が走る。旗内には、1900 年初頭に作られた比較的規模の大きなツァーガン（察罕、嵯崗）駅が存在する。鉄道はハイラル河の南岸を河とほぼ併行して走り、ゴリン＝アイマクはハイラル河南岸から鉄道沿線周辺の地域と考えられる。
- (13) [シャーリーボー・ナムスライ 1999: 55] によれば、ウルジートはバヤン＝ツァーガン山東方 20 km（現地で確認するとウルジートはバヤン＝ツァーガンの西北方に存在する。西方の誤りか）にあり、有刺鉄線に囲まれた陣地が設けられていたとある。[佐村(編著) 1993: 175] には、1945 年 8 月のソ連侵攻を受けジャライ＝ノール方面からハイラルへ撤退する部隊の中継点として「日本軍構築の遊撃拠点オロジータ陣地」が登場する。これは恐らくウルジートを指すと思われる。
- (14) ウルジートは、地理的分布から言えばオールジンに近く、A 氏は、ウルジートはオールジン＝アイマクに含まれるのではないかと述べた。オールジンの大部分は、次に述べる如く 1910-20 年代にウイゼンに率いられハルハに逃れるが、シャーリーボー氏に依ればウルジート＝アイマクはハルハに逃れた事実はないという。推測の域を出ないが、ウルジートは、オールジンのうちウイゼンと袂を分かって故地に残り続けた集団か、あるいはウイゼンらが逃げた後、オールジン周辺で遊牧するようになった集団であったために独立性を強めたとも考えられる。詳細は不明である。
- (15) [達喜僧格 1985: 42-45] では、シブシンゲの戦乱を「丁巳年動乱」と述懐している。なお戦乱の背景にあるパボージャブ部隊の動向とその政治背景については近年 [中見 2013: 第 6 章-8 章] が詳論している。
- (16) [öljei et al. 2002: 419]。特に出典は記されていない。この数値は後述の 1938 年の旗全体の戸口数からみて、およそ旗の三分の一ほどに相当する。
- (17) この氏の口述は歴史事実とも符合する。実は、1921 年にモンゴル人民政府とフルンボイル副都統公署の間で、ハルハに越境したバルガ人を巡る問題が話し合われ、1923 年に協定が結ばれている。その協定の一文に「何千人もの規模で遊牧移動してきたバルガの人々が、バルガに戻ることを望んだ際には、モンゴル政府はこれに妨害を行わない」とある [青木 2011: 347-350]。すなわち、ウイゼンテンの人々は、1917 年のシブシンゲの争乱によって発生した「何千人もの」越境避難民の一部であり、7～8 年後、つまりこの 1923 年の協定締結後の措置によって、遅くとも 1925 年頃までに故地に戻ったと考えられる。
- (18) アディヤ氏は、自身がハルハで出生した理由は不明で、清朝崩壊後ハルハとの境界は特に遮るものなく、日常的にハルハと往来していたと口述している（ハルハ、バルガ間の自由な往来については [吉田 2002: 87] でも報告されている）が、ウイゼンテン＝アイマクの人々については時期的にみて前注の如き政治動乱が背景にあると思われる。
- (19) ホーロイの原義は喉だが、地形に用いる場合は狭い地峡を指す。現地調査においても、小砂丘帯の南の低湿な平原のことを指すことが判明し、[öljei et al. 2002: 14] と一致した。
- (20) A 氏も、筆者とイフ＝オール山頂に登った際、バガ＝オールとの同時祭祀の習慣について言及し、両山の祭祀は元々ハイラル河周辺の住民が行っていたと述べた。[öljei et al. 2002: 247] の記述を紹介すると、「東北アイマク」が両山祭祀を行っていたならば、「東北アイマク」はハイラル＝ゴル＝アイマクに包摂されるはずだ、と述べた。
- (21) 鑲白旗は本来 3 つのソムから成る。前掲注 (9) のとおり、1938 年の満洲国地方行政改革により鑲白旗 3 ソム（当時はシン＝バルガ左翼旗東努図克第 4～6 佐と言った）に 12 のトスゴン（村）を作ったが、その時の統計が複数の文献に残っている。ただし戸口数は異同があり、[gereltü1997: 422-431] では旗全体で 305 戸 1,624 人（第一ソム 97 戸、第二ソム 89 戸、第三ソム 119 戸）、[öljei et al. 2002: 33-36] では旗全体で 272 戸 1,502 人（第一、第二ソムが 97 戸、第三ソムが 78 戸）である。
- (22) フルンボイル地域の移動の特徴を論じた [吉田 2002] によれば、同地域では年間 40～60 回、距離にして 300～600 km を移動し、冬期は時にハルハまで越境し、固定した冬営地を設けずに過ごしたという。このような頻繁かつ広範囲の移動はフルンボイル地域の遊牧民の特徴と言える。シャーリーボー氏は、人民共和国移住後にハルハの牧民が冬にほとんど移動しないのを見て驚いたという。
- (23) 世襲佐領の名はどちらもチメドであり、氏の記憶が混同している可能性もある。ただしダルガのソノム、センゲについては、所属アイマクが異なり、両名とも官吏や世襲佐領ではなく年長の人格者であったと述べている。

- (24) オボーとは境界や祭祀対象の自然地形に作られる石積みなどを指す。オボー祭祀、特に近代の内モンゴル地域におけるオボー祭祀とその変容は〔吉田 2006〕が詳しい。〔吉田 2006 : 265〕に、満洲国期シン＝バルガ旗におけるボグド山祭祀を紹介している。
- (25) ここで紹介されている小規模のオボーが、小アイマクのオボーと対応する可能性はあるが未調査である。ただしシャーリーボー氏は、小アイマクのなかで独自のオボー祭祀を行っている集団は後述するウルジート、オンゴン＝ブルド以外はなかったはずだと述べた。
- (26) 該旗の最も象徴的ランドマークは、旗全体の祭祀対象であるバヤン＝ツァガーン山であるが、この3地域はちょうどバヤン＝ツァガーンから見て、西方（オールジン）、東南方（ホーロイ）、北方・東北方（ハイラル河）に位置する。
- (27) 元の表には、第一バグと第二バグの区切りが記されていないが、氏は、No. 1 から No. 64 までが第一バグ、No. 65 から No. 130 までが第二バグ構成員であるとしたので、それに従って分割した。
- (28) 前掲注 (21) にある如く鑲白旗の全人口は 1938 年段階で 300 戸 1,500 人程度と考えられる。本論末尾の【表：1946 年フルンボイル＝ソム構成員の所属アイマク】から鑲白旗出身者を合計すると 216 戸 800 人となるので、1945 年には旗民のおよそ半分が移住してきたことになる。
- (29) 鑲黄旗と正白旗は鑲白旗の南隣にあり、ともに左翼に属す。氏に依れば、多数の鑲白旗人が移住のため南下した際、同調して移住してきた者だと言う。またホーチン＝バルガのうち No. 76、No. 130 は、鑲白旗の富裕戸に雇われた家畜番として居住していた者だと述べた。なお No. 130 はホーチン＝バルガとして計算した。
- (30) 〔シャーリーボー・ナムスライ 1999 : 62, 66〕には、第二バグ副長はラブダン＝バートルとある。姓のラブダンは父親の名前であることから第二バグ中にラブダンを探すと、No. 66 ラブダン（ハイラル）のみが該当する。また、第四バグ書記はザヤート＝ゴムボスレンとある。第四バグのザヤートは 2 名いる。No. 204 ザヤート（オールジン）の息子か、No. 206 ザヤート＝アオールザナ（オールジン）の兄弟の可能性もある。
- (31) 第四バグはフーヒンテイ以下再編前の旧第三バグ官吏がそのままスライドしたため、フーヒンテイ以下オールジン出身官吏が多くなったと思われる。第三バグ書記のノロブ氏は〔吉田 2002 : 86〕にも登場する古老である。日本語に堪能で書記の経験もあることからホーロイ所属ではあるが抜擢されたのではないかと推測される。
- (32) なお氏によれば、フルンボイル＝ソムを現在のドルノド県の地に定めるに当たっても、シャーリーボー氏らが土地の視察中に、故郷の鑲白旗と同じランドマーク名を多数見つけたことが大きな決め手になったという。例えば、現在のドルノド県フルンボイル＝ソムにある「バヤン＝オール」は鑲白旗全体の中心的ランドマークであるバヤン＝ツァガーン山、「エルデネ＝ウインドゥル」は鑲白旗第二ソムが祭るエルデネ＝オボーに対応するほか、「ウルジート＝オール」はウルジート＝アイマクが祭るウルジート＝オール、「ハブスガイン＝ボラダ」はオールジン＝アイマクが祭るノゴーン＝ハブスガイト、「デル＝オール」は東北アイマクが祭るハイラル河北岸のデル＝オール（イフ＝オールの別名）というように、故地で各アイマクが祭祀対象としてきた重要なランドマークが見事に対応する。ランドマークを核とする地縁結合が、20 世紀前半期、さらには移住後においても継承された一例と言えるだろう。

【引用文献・日文、漢文】

阿・恩克巴図、額爾根巴雅爾、色爾森泰

1994「額爾欽巴図先生伝略」『呼倫貝爾盟文史資料』5 : 51-65。

青木雅浩

2011『モンゴル近現代史研究：1921-1924 年——外モンゴルとソヴィエト、コミンテルン』東京：早稲田大学出版部。

岡洋樹

2007『清代モンゴル盟旗制度の研究』東京：東方書店。

尾崎孝宏

1996「モンゴル牧民の社会的結合に関する一試論——20 世紀前半の東部南モンゴルにおける調査資料より」『民族学研究』60(3) : 234-248。

1999「世帯・親族と地域社会」島崎美代子、長沢孝司編『モンゴルの家族とコミュニティ開発』東京：日本経

- 済評論社：51-73。
- 2000「モンゴル牧民の移動ルート選定の安定性——モンゴル国スフバートル県の事例」『鹿大史学』48：1-28。
- 2003「モンゴル国における移動・牧畜・近代国家——オンゴン・ソムの事例」『東北アジアにおける民族と政治 東北アジア研究センターシリーズ第5号』72-88。
- 小貫雅男
1985『遊牧社会の現代』東京：青木書店。
- 風戸真理
2009『現代モンゴル遊牧民の民族誌——ポスト社会主義を生きる』京都：世界思想社。
- 小長谷有紀
1996『モンゴル草原の生活世界』東京：朝日新聞社。
- 佐村恵利(編著)
1993『あゝ、ホロンバイル蒙古物語』福岡：私家版。
- シャーリーポー、ナムスライ
1999「ドルノド=アイマゲのフルンブイル=ソム建設の歴史記録(1945-1950)」(吉田順一、青木雅浩、永井匠 訳)『日本とモンゴル』98：50-91(原文は、*Я.Шаарийбуу, Б.Намсрай 1995 Дорнод Аймгийн Хөлөнбуйр сум үүсэж байгуулагдсан тухай түүхэн тэмдэглэл (1945-1950 он). Улаанбаатар.*)。
- 達喜僧格
1985「丁巳年動乱」『呼倫貝爾文史資料』2：42-45。
- 橋誠
2011『ボグド・ハーン政権の研究』東京：風間書房。
- 田淵陽子
2014「[シンバルガ左翼総管衙門文書]三種(1945年9-10月)について」『東北アジア研究』18：125-159。
- 利光(小長谷)有紀
1986「モンゴルにおける家畜預託の慣行」『史林』69(5)：770-794。
- 中村篤志
2003「清代モンゴルの比丁冊に見るタイジの血統分枝集団」『集刊東洋学』90：1-21。
2011「清朝治下モンゴル社会におけるソムをめぐる——ハルハ・トシェートハン部左翼後旗を事例として」『東洋学報』93-3：1-25。
- 中見立夫
2013『「満蒙問題」の歴史的構図』東京：東京大学出版会。
- 哈豊阿
1941「新巴爾虎族の社会制度」『蒙古研究』3-1：20-40。
- 日野千草
2001「モンゴル遊牧地域における宿营地集団」『リトルワールド研究報告』17：89-125。
- ブレンサイン
2003『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』東京：風間書房。
- 柳澤明
1993「新バルガ八旗の成立について——清朝の民族政策と八旗制をめぐる一考察」『史学雑誌』102-3：369-403。
1995「ブトハとフルンブイルにおける『八旗』の性格——特に理藩院との関係について」石端秀雄編『清代中国の諸問題』東京：山川出版社：349-364。
1997「清代黒龍江における八旗制の展開と民族の再編」『歴史学研究』698：10-21。
1999「ホーチン=バルガ(陳巴爾虎)の起源と変遷」『社会科学討究』44-2：345-369。
- 吉田順一
1984「モンゴルの伝統的な遊牧の地域性」『史滴』5：57-90。
1999「ヤー・シャーリーポー氏の経歴」『日本とモンゴル』99：33-47。
2002「遊牧における移動と定着——モンゴル伝統遊牧の立場から」『東北アジア研究センター叢書』6：79-95。
2006「近現代内モンゴル東部地域の変容とオポー」早稲田大学アジア地域文化エンハンシング研究センター編『アジア地域文化学叢書1 アジア地域文化学の構築——21世紀COEプログラム研究集成——』東京：雄山閣：255-282。

【引用文献・蒙文】※アルファベット順

duyarjab,Q.

1995 *Baryu köbegetü sir-a qosiyun-u oyilaly-a,1734-1948*. Qayilar : öbör mongyol-un soyol-un keblel-un qoriy-a (花塞・都嘎爾扎布 1995『巴爾虎鑲黃旗志 1734-1948』海拉爾：内蒙古文化出版社)。

gereltü,B.

1997 *sin-e baryu jëgün qosiyun-u tosqun-u büirildüča-yin tuqai bayičayalta* (1939) *sin-e baryu jëgün qosiyun-u soyol teüke-yin material 2* : 422-431 (ゲレルト 1997「シン＝バルガ左旗のトスゴンの構成に関する調査(1939)」『新巴爾虎左旗文史資料』2)。

öljei, W. & bodi, š. & gwangden, A. & aradnabadzar, A. & sarangerel, N.

2002 *Baryu köbegetü čayan qosiyun (yalbar ayula sumun)-u oyilaly-a,1734-2001*. Qayilar : öbör mongyol-un soyol-un keblel-un qoriy-a (烏力吉、宝徳、官布、根登、阿日達那巴子爾、薩仁格日勒 2002『巴爾虎鑲白旗(嘎拉布爾蘇木)史志(1734-2001)』海拉爾：内蒙古文化出版社)。

öljeimorutu

1985 *jëgün qosiyun-u tosqun bayiyluysan ekilete ba tegüsülte. sin-e baryu jëgün qosiyun-u soyol teüke-yin materiyal 1* : 39-45 (ウルジーモルト 1985「左翼トスゴン建置始末」『新巴爾虎左翼文史資料』1)。

【付記】本論文は、文部科学省科学研究費補助金(若手研究B:22720262)および東北アジア研究センター共同研究「北アジアにおける帝国統治とその遺産に関する研究」の研究成果の一部である。

表 1946年フルンボイル＝ソム構成員の所属アイマク

番号	名前	家族数	家畜数	姓	所属アイマク	その他コメント
第一バグ						
1	ガラムシル＝ガンジョール	5	210	ウンチュープド	ウルジート	
2	バザル＝バヤル	4	155	ウンチュープド	ウルジート	バグ書記
3	ナイラルト＝ナムジル	5	105	ウンチュープド	ウルジート	
4	ナイラルト＝ソノム	4	390	ウンチュープド	ウルジート	
5	ソノム＝ゴムボ	5	333	ウンチュープド	ウルジート	
6	ナイラルト＝ジャンジャー	3	53	ウンチュープド	ウルジート	
7	バンズラグチ＝ジグミド	3	451	ウンチュープド	ウルジート	
8	ラムパラン＝トゥッデン	2	107	フイツレグ	ウルジート	
9	バルダンジャブ＝ジョドブ	3	96	シャライド	ウルジート	
10	バルダンジャブ＝ツェレンバルジル	5	497	シャライド	ウルジート	
11	シャンジュミヤタブ＝ジグメド	3	103	ガルゾード	ウルジート	
12	ゴジ＝ツェグミド	3	65		鑲黃旗	
13	デンデブ＝ボヤン	5	43	ウンチュープド	ウルジート	
14	バンズラグチ＝ドルチル	3	22	ガルゾード	ウルジート	
15	サンジュミヤタブ＝ミヤダグマー	2	82	ガルゾード	ウルジート	
16	ビレグ＝バヤルサイハン	5	44	ハルチョド	正白旗	
17	セムジド＝トゥッデブ	5	79	ウンチュープド	ウルジート	
18	アムガラシ＝セングーバザル	2	48	ウンチュープド	ウルジート	
19	ナムジルダグバ＝ダムディン	1	21	ウンチュープド	ウルジート	
20	ニヤム＝プレブ	2	16	ウンチュープド	正白旗	※
21	エレート＝スフバートル	4	115	セーヘル	ハイラル	イレートの間違い

22	ゴムボ = ロブサン	2	150	ウンチュープド	ハイラル	
23	ヤダムスレン = シャーリーボー	2	297	ガルゾード	ウルジート	
24	デンデブ = ボヤンスレン	6	22	フブドウッド	ウルジート	
25	ナサンチド = マジグスレン	3	68	ガルゾード	ウルジート	
26	チャグナー = ツェベグジャブ	6	1,337	ハルチョド	正白旗	家畜持ち
27	チャドラーバル = ドルジツェベーン	4	223	ハルガナ	正白旗	
28	ジョム = バヤルト	6	795	ハルガナ	正白旗	家畜持ち
29	センゲー = ダシビヤムバ	8	862	ハルガナ	正白旗	
30	ダンスラン = ニヤム	2	39	バグチョド	正白旗	
31	ナムジル = ツェベーンソドノム	7	550	ガルゾード	正白旗	副バグ長
32	ドンドグ = ベグズ	4	886	ガルゾード	正白旗	
33	ウルジー = チョローン	5	131	ウンチュープド	ウルジート	
34	ニヤムボー = ナチン	8	1,147	ガルゾード	正白旗	
35	ダシ = トグトホ	4	91	ウズーン	鑲黄旗	
36	トゥブド = ボムサン	3	819	ガルゾード	正白旗	※。家畜持ち
37	トゥムルゴルト = ダムバダルジャー	1	101	ガルゾード	正白旗	
38	楊貴金	1	6	漢人		
39	ビリグ = ダシャーダイ	1	382	ガルゾード	ウルジート	
40	ジャードー = ジャルサン	2	292	ガルゾード	ウルジート	
41	ガヤーバザル = トグトホ	2	20	ガルゾード	ウルジート	
42	イシゲー = ラバーンチュヘル	6	68	バグチョド	正白旗	バグ長
43	ラバーンチュヘル = ドガルジャブ	3	64	バグチョド	正白旗	
44	ハヤンヒャルバー = チョイドグ	4	80	ホアツァイ	正白旗	ハインケルワーの間違い
45	バーシル = アディヤー	6	301	ガルゾード	正白旗	
46	マルガ = ソガルジャブ	4	96	ガルゾード	正白旗	
47	パラーン = プレブ	3	156	ハルガナ	正白旗	
48	バドラーン = バータル	8	363	ハルガナ	正白旗	
49	ツェグミド = バザル	5	49		鑲黄旗	
50	マジグジャブ = ウルジースレン	2	19		ハイラル	
51	ツェベーン = ビレグバータル	4	72	アブガチョード	ハイラル	
52	ハルトマイ = ヤダム	2	41	アブガチョード	ハイラル	
53	ジョーボンドイ = ソガル	7	3,789	ガルゾード	正白旗	家畜持ち
54	ゴンゴルジャブ = ゲルゲー	4	12	ガルゾード	ハイラル	
55	ドンドグ = ホルツ	3	28	バグチョド	正白旗	
56	チメド = ミヤグマル	4	4	ホダイ/ハルガナ	鑲黄旗	
57	ナサンチド = ジャムバ	3	99	ガルゾード	ウルジート	
58	ガラムシル = ダシ	5	38	ウンチュープド	ウルジート	
59	ミジグセンゲー = アヨールザナ	2	8	バグチョド	正白旗	
60	シュヘルテイ = マンジャーン	3	32	アブガチョード	ウルジート	
61	ナムタル = センゲー	4	49	ガルゾード	ハイラル	
62	トゥル = トウンテーン	7	38	ウンチュープド	ハイラル	
63	ジャルサン = アルスラン	5	21	ガルゾード	ハイラル	

64	ミデル = ゲレグ	1	179			正白旗	
	小計	246	16,859				
第二バグ							
65	ビリグバルミド = ユルールト	8	331	ハルガナ	ハイラル		バグ長。オンゴン = ブルド。旧第三ソム章京
66	ジャムスラン = ラブダン	5	151	ウンチューブド	ハイラル		
67	サムジャー = バルダンジャブ	2	70	ハルガナ	ハイラル		
68	グルグー = デンデブ	5	90	オリアド	ホーロイ		
69	レグデル = ツェレン	2	47	ハルガナ	ハイラル		
70	バートル = ドグソムスレン	3	327	ウズーン	ハイラル		
71	サンガド = リンフボイ	6	608	ウズーン	ハイラル		
72	リンフボイ = ガラムシル	5	1,100	ウズーン	ハイラル		
73	グベーリ = ポンツァグ	5	506	ウンチューブド	ホーロイ		
74	バグズ = ボムサン	5	415	ウンチューブド	ハイラル		
75	サイボヤン = ノロブ	2	17	ガルゾード	ホーロイ		
76	シャノレホイ = シンゲー	4	74	ドールガチン	ホーチン = バルガ		家畜番として雇用
77	バダム = プレブ	2	19	ガルゾード	ホーロイ		
78	サンカド = ムンフ	5	274	ウンチューブド	ホーロイ		
79	デスレン = デルゲル	4	46	アブガチョード	ホーロイ		
80	ダシ = ボリ	2	16	ガルゾード	ハイラル		女性
81	ヒシグト = オイドブ	5	210	フィツレグ	ホーロイ		
82	ヒシグト = ヤダム	4	67	フィツレグ	ホーロイ		No. 81 の弟
83	ゴムボ = メンド	3	47	フィツレグ	ハイラル		
84	ノロブ = ピヤムバ	3	27	フィツレグ	ホーロイ		
85	センゲー = シャグダル	5	447	ウンチューブド	ホーロイ		
86	パール = ネメフ	3	39	フブドゥード	ハイラル		
87	ツァンバ = ウルジーン	2	20	シャライド	ハイラル		
88	チャブガ = デンスマー	3	20	ハルガナ	ハイラル		女性
89	ジョドブ = トゥブデン	4	176	タブナン	ホーロイ		
90	バガー = ウヌル	2	71	タブナン	ホーロイ		
91	ナムスライ = ゾンドイ	1	94	ガルゾード	ホーロイ		
92	ボロー = サースレン	7	163	ガルゾード	ホーロイ		
93	ダムディン = バドラー	8	1,372	フィツレグ	ホーロイ		
94	ビリグト = テグシ	4	50	ハルガナ	ハイラル		
95	ナスト = ソミヤー	4	129	ウズーン	ハイラル		
96	バルガン = ジャムバル	4	99	アブガチョード	ホーロイ		バグ書記。旧ソム長。イフ = ノール = アイマゲ
97	バルガン = トゥブデン	1	51	アブガチョード	ホーロイ		No. 96 の兄でラマ
98	ジグスレン = ダムディンバーンチグ	4	58	アブガチョード	ホーロイ		

99	ザグド = ペルジド	2	51		?	女性
100	スレンジャブ = バト	3	203	オリアド	ホーロイ	イフ = ノール = アイマク
101	ゴムボジャブ = ジャラーボン	5	173	ガルゾード	ホーロイ	
102	ゴムボジャブ = ツェエン	5	573	ガルゾード	ホーロイ	ツウェンの間違い
103	トゥムル = バダムジャブ	5	950	オリアド	ホーロイ	家畜持ち
104	ツェベグジャブ = エンデーブー	4	94	オリアド	ホーロイ	
105	セレーテル = ユンデン	4	49		ハイラル	
106	ドグソム = アルタンゲレル	8	736	ハルガナ	ハイラル	
107	ジャルスライ = ミヤンガト	5	32	ハルガナ	ハイラル	
108	ヤダムジャブ = ヤダムスレン	4	319	ハルガナ	ハイラル	
109	ジョドブ = ジグメド	3	33	ウズーン	ホーロイ	後のバグ長
110	ダムディン = バザルバーン	4	238	ウンチューブド	ハイラル	
111	ウルジー = シャグダル	4	17		ホーロイ	
112	サンジャーダイ = メンドサイハン	1	52	シャライド	ホーロイ	サンジャーダの間違い
113	ビヤムバ = サムピル	7	432	ウンチューブド	ハイラル	家畜持ち
114	モニー = ヤマーランズ	3	48	ウンチューブド	ハイラル	
115	ウルジー = アグダン	5	515	ウズーン	ハイラル	
116	チョイロブ = ミヤダグマー	1	66	ウズーン	ハイラル	
117	バトオチル = ラグチャー	2	453	フブドウッド	ハイラル	家畜持ち
118	ジャミヤン = ゴムボスレン	5	1,376	ウズーン	ハイラル	家畜持ち
119	ビリグト = メンド	5	69		ハイラル	
120	アヨーシ = アルタンバヤル	7	934	セーヘル	ホーロイ	家畜持ち
121	ドンドグ = セルオド	5	82	ジョロン	ホーロイ	
122	ビリグト = ペルジュー	3	40	フブドウッド	ホーロイ	
123	デンデブ = バザルゴルドー	2	140	アブガチョード	ホーロイ	
124	デンデブ = バーン	3	56	ウンチューブド	ハイラル	
125	レンチン = ノロブ	6	198	ガルゾード	ホーロイ	
126	ボロルドイ = バルダン	4	355	アブガチョード	ホーロイ	
127	ドグトンガー = ゴドブ	2	1,027	ウンチューブド	ホーロイ	家畜持ち
128	ジゲジト = ボヤント	7	742	アブガチョード	ホーロイ	
129	ビリグバートル = バボードルジ	4	120	ジョロン	ハイラル	
130	ブセーボー = ウルゲンジャブ	1	1	チブチン	ホーチン = バルガ	家畜番として雇用、ハイラル = アイマクに居住。
	小計	261	17,405			
第三バグ						
131	ジャードー = ゴムボ	3	375	アブガチョード	ホーロイ	
132	ゴムボ = ノロブ	3	380	アブガチョード	ホーロイ	No. 131 の息子。バグ書記
133	ヤダム = アルタンゲレル	3	200	アブガチョード	ハイラル	

134	ヤダム = サムジャブ	3	113	アブガチヨード	ハイラル	
135	バダム = シャラブ	3	22	ウズーン	ホーロイ	
136	ドゥゲルジャブ = ソミヤー	4	2,115	アブガチヨード	オールジン	家畜持ち
137	ダムディン = ベグズ	5	38	ジョロン	オールジン	
138	ナムジルダシ = ラブダン	2	1,887	ハルガナ	ハイラル	
139	ジャムバル = フデルチヨローン	4	1,899	ハルガナ	ハイラル	
140	スフ = シャラブ	1	10		オールジン	
141	プレババルチン = バルダンツェベーン	2	5	ハルガナ	ハイラル	
142	ウイゼンダシ = プレバ	5	1,686	ウンチューブド	オールジン	家畜持ち
143	バダム = ボド	3	213	ウズーン	オールジン	
144	ダムディン = サンジュミヤタブ	3	221	ウンチューブド	オールジン	
145	バト = ポンツァグ	5	228	ガルゾード	オールジン	
146	ウイゼンダシ = アディヤー	4	838	ウンチューブド	オールジン	家畜持ち
147	ウイゼンダシ = トゥッデン	3	156	ウンチューブド	オールジン	
148	ウルグン = ドマー	2	205	ガルゾード	オールジン	
149	エレボー = オイドブ	2	41	ウンチューブド	オールジン	
150	サンジャージャブ = バザルバーン	3	51	セーヘル	オールジン	
151	ダシ = サインホルツ	3	294	ウンチューブド	オールジン	
152	ウイゼンダシ = ジャンジンボー	2	1,274	ウンチューブド	オールジン	家畜持ち
153	ネレン = プレバ	3	261	セーヘル	オールジン	
154	サマージャブ = ニヤム	2	72	ジョロン	オールジン	女性
155	ツェベンドー = オルトナサン	5	128	ハルガナ	オールジン	
156	バルジル = アディヤー	6	1,307	ハルガナ	オールジン	家畜持ち
157	ジャラムボー = サムスレン	6	370	アブガチヨード	オールジン	
158	アディヤー = サムダン	2	52	ジョロン	オールジン	
159	スンデブ = サムボー	2	24		オールジン	※
160	ジャラムボー = ジャムバルバボー	5	89	アブガチヨード	オールジン	
161	バダムシル = アルタンゲレル	3	250	ガルゾード	ハイラル	
162	ミンジュール = ツェベーン	5	141	ジョロン	オールジン	バグ長。元軍人で少尉
163	ウーバイ = サンジュミヤタブ	5	78	ジョロン	オールジン	
164	バザルバーン = ツェレンドルジ	3	406	ジョロン	オールジン	
165	サンジュ = アオールザナ	5	198	ジョロン	オールジン	
166	ダジョー = ジャミヤンシャラブ	1	11	フィツレグ	オールジン	
167	ジャルガル = ツェレンジャブ	4	226	ガルゾード	オールジン	
168	タンガド = ラドナー	1	14	フィツレグ	ハイラル	※
169	ラドナー = スフ	3	240	セーヘル	オールジン	
170	トグミド = ジャブザンホルロー	6	138	セーヘル	オールジン	
171	バータル = ソドノムダシ	6	107	セーヘル	オールジン	
172	ソドノムダシ = ソミヤー	5	29	セーヘル	オールジン	
173	アリゴーン = サースレン	3	20	フブドウッド	オールジン	
174	バルガン = サマージャブ	6	206	ジョロン	オールジン	

175	バンズラグチ = ペルジェー	4	145	ウンチューブド	オールジン	ピリンライの間違い
176	プセーブー = サンダグ	1	4	チブチン	ホーチン = バルガ	※
177	ハルタル = ジャマン	4	125	セーヘル	オールジン	ジャルツァンの間違い
178	ナサンホタグ = ガルマー	5	577	シャライド	オールジン	女性
179	ウブグン = ナムジム	6	1,811	セーヘル	オールジン	家畜持ち
180	ジャムスラン = ソドノムツェレン	5	190	ガルゾード	オールジン	
181	バーンチグ = ダシ	6	141	ガルゾード	オールジン	
182	ダシ = バンズラグチ	2	68	ガルゾード	オールジン	
183	バーンチグ = マジグ	3	61	ガルゾード	オールジン	
184	ドンドグ = ナスト	2	12	ジョロン	オールジン	
185	ナチン = ラブダン	1	28	ジョロン	オールジン	
186	マジグ = サマージャブ	1	10	アルトチン	オールジン	
187	ボンツァグ = ドブチン	5	140	ジョロン	?	
188	サムスレン = ウルグンガー	4	36	フィツレグ	鑲黄旗	
189	ダルハー = アヨールサド	4	205	ガルゾード	オールジン	
190	サンジュ = サランゲレル	3	356	セーヘル	オールジン	
191	アビルメド = エルデームー	3	72	ウンチューブド	オールジン	副バグ長
192	ジャンジャー = マンダル	2	12	セーヘル	オールジン	
193	ガラムシル = バータル	3	59	ウンチューブド	オールジン	
194	ジャムバル = シャラブ	1	14	フィツレグ	オールジン	
	小計	220	20,684			
第四バグ						
195	ツェルマー = ナツァグドルジ	2	731	ウンチューブド	ホーロイ	
196	ジャルサン = ボド	6	87	ウンチューブド	ホーロイ	
197	ジャルサン = ゴムボ	6	56	ウンチューブド	ホーロイ	
198	ジョドブ = ソガル	1	30	ウンチューブド	オールジン	※。女性
199	ゴムボジャブ = サムスレン	6	583	ジョロン	ハイラル	家畜持ち
200	サムスレン = ドガル	6	463	ジョロン	ハイラル	No. 200~202 は兄弟。家畜持ち
201	サムスレン = デンデブ	5	70	ジョロン	ハイラル	
202	サムスレン = バータル	2	309	ジョロン	ハイラル	
203	グルグー = マジグ	1	26	チブチン	ホーチン・バルガ	※
204	ジャンジャー = ザヤート	4	599	アルトチン	オールジン	
205	ペルジェー = メンド	2	11	アブガチャード	ハイラル	
206	ザヤート = アヨールザナ	4	142	アルトチン	オールジン	
207	ペルジェー = ホトランガー	2	39	アルトチン	ホーロイ	
208	エルデニ = スレン	1	19	アルトチン	ハイラル	
209	サンダグ = スレン	4	29	ハルガナ	オールジン	
210	サンダグ = ブルネー	1	30	ハルガナ	ハイラル	
211	ドブドン = ドルジ	5	163	ウズーン	オールジン	

212	オルトナサン = ジャルサン	2	47	ウンチュープド	オールジン	
213	マンタイ = グンデーニヤムボー	5	98	セーヘル	ハイラル	
214	イシ = オイドブ	5	229	ガルゾード	オールジン	
215	ゴムボ = オイドブ	3	465	ウンチュープド	ホーロイ	
216	ナイダン = ドグソム	3	263	シャライド	オールジン	
217	ドグソム = バータル	4	266	シャライド	オールジン	
218	ビリグト = ヤダムジャブ	7	88	アブガチョード	ホーロイ	
219	バーンチグ = ツェベグジャブ	5	906	アブガチョード	オールジン	
220	サムボー = バルハスバディ	3	47	ウンチュープド	オールジン	サバディの間違い
221	バンジンボー = バガー	3	12	シャライド	ハイラル	バンジンボーの間違い
222	オージャー = チョイジブ	2	24	オリアド	ハイラル	
223	チョイジブ = ダムディン	4	24	オリアド	オールジン	
224	アビルメド = ウルジー	8	565	ハルガナ	オールジン	
225	ダシドンドグ = フーヒンテイ	5	363	ウズーン	オールジン	バグ長。ボンホン。分割前の第三バグ長。旧第二ソム領催
226	ヤダムジャブ = サインゲー	3	63	セーヘル	ハイラル	※。家畜持ち
227	ゴドブ = ポンツァグダシ	2	266	ウンチュープド	ハイラル	
228	バトオチル = セレーテル	4	136	ウンチュープド	オールジン	
229	シャグダルスレン = ボド	7	231	アブガチョード	ハイラル	
230	シャグダルスレン = ツェベグジャブ	4	172	アブガチョード	ハイラル	
231	ダムディン = チメド	1	95	アブガチョード	ハイラル	
232	ダシニヤム = ゴンゴル	6	212	アブガチョード	ハイラル	
233	ムンフ = ボンタル	4	125	ウンチュープド	ホーロイ	
234	バザルバーン = マンズシル	6	16	ウンチュープド	ハイラル	
235	チフ = ドブドン	3	6	ウンチュープド	ハイラル	
236	シャグダル = ウルジン	3	28	アブガチョード	プリヤート	
237	ジャムスランジャブ = ジャルナイ	5	97	ウンチュープド	ハイラル	
238	ソムド = アムガー	3	25	ウンチュープド	ハイラル	
239	ニヤムボールドルジ = ダシバータル	2	26	ウズーン	ハイラル	※
240	ツェエン = ジョドブ	2	9	ウズーン	オールジン	No. 241 と兄弟
241	センゲー = モーノホイ	2	19	ウズーン	オールジン	
242	アヨーシ = ホルホーン	3	252		プリヤート	
243	バーンチグ = バザルラグチャー	4	683	アブガチョード	オールジン	副バグ長
244	ゴムボジャブ = ビヤムバ	3	3	シャライド	ハイラル	通称「酔っぱらいのビヤムバ」
245	アディヤー = ジャルガーボー	4	867	フブドウッド	オールジン	
246	デンデブ = トウメンバヤル	2	14	ウンチュープド	ハイラル	家族はいないはず
247	ツェベーン = ダムビル	2	14	シャライド	ハイラル	
248	ブドチル = ポンツァグ	6	2,946	ジョロン	ホーロイ	女性。家畜持ち

249	ゴムボ = サンジュミヤタブ	5	1,355	アブガチヨード	オールジン	
250	サンジュミヤタブ = ツェレンバル ル	3	1,320	アブガチヨード	オールジン	家畜持ち
251	ジゲジド = アルバイ	3	53	ウンチューブド	オールジン	No. 252 と兄弟
252	アディルビシ = アビド	1	40	ウンチューブド	オールジン	
253	ツォグト = ミヤンガンバヤル	3	94	アブガチヨード	ハイラル	
254	ツェベーン = エルデネ	2	15	ジョロン	オールジン	
255	ジャシン = ムンフ	2	33		ハイラル	
256	テムベレル = エルデネ	3	38		プリヤート	
	小計	220	16,037			
	総計	947	70,985			